

「寄稿」 ウクライナ降伏論への疑問：

ただ「生きる」ということでなく

慶応大教授・元内閣官房副長官 松井孝治氏

令和4年（2022年）4月3日産経新聞記事より

ロシアがウクライナ侵攻を開始して1カ月超（4月3日時点）。ウクライナ軍の激しい抵抗もあり、短期決着に失敗したロシア軍は民間施設をも含む無差別攻撃を続け、犠牲者は増えるばかりだ。ロシアの蛮行を前にあらためて戦争と人命について考える。そんな折、SNSである政治家の投稿を目にした。

『大学生の娘と「一番守るべきものは何か」という話になった。娘は「それは命でしょ」と即答。それならばウクライナはロシアに即時降伏するだろうし、国民が国に残って戦うことはない。彼らが独立と民主主義に命以上の価値を置いて戦っている姿から我々は目を背けてはいけないと思う。』

このやり取りを我々はどう受け止めるべきだろうか。この政治家の娘さんの考え方は我が国では決して珍しくはない。著名人も含めて少なからずウクライナの政治指導者に降伏を促す声がある。指導者は国民の生命を守るためにあらゆる手段を尽くすべきだとの論理は確かに説得力がある。ただ、同時に「命以上の価値」のために戦うウクライナ国民を否定できる人もいないだろう。

細谷雄一慶大教授は、やはり SNS の中で、こう語っておられる。

『「ウクライナが降伏すべき」というコメントが他国と比べて日本で出てきやすい理由は、平和、独立、自由という価値のうちで、日本は戦争で平和を喪失した経験はあるが、独立や自由を失った歴史的記憶が（GHQ の平和的な占領の短期間を除けば）ないからでは。多くの場合、独立や自由を失う悲劇は壮絶。』

GHQ（連合軍総司令部）の占領は、世界史上の多くの異民族支配と比較すれば、穏やかだったといえるが、それでも日本が味わった様々な悲劇や屈辱は少なくはなかった。そのことを考えれば、国民の生命を守るとともに、民族や国家の独立、尊厳、自由を守ることがもっと重視されてしかるべきではないかと筆者も考える。

確かに命は大切だが、それはただ生きるということとは少し違うと思うのだ。

ソクラテスの言葉の意味

古代ギリシャの哲学者ソクラテスは、投獄され死刑執行を待つ身となったが、親友クリトンに脱獄を勧められると、大切なのは、ただ生きることではなく

善く生きることである、善く生きることと、美しく生きること、正しく生き
ことは、同じであると述べ、それを拒絶する。

では、「ただ生きることではなく善く生きる」とは、どういうことなのか。
哲学者であり、ソクラテス研究の第一人者である田中美知太郎氏は、昭和 51 年
の北海道大創基百周年記念講演でこう述べられている。

『人生の意味は・・・現在と過去に限界されないひとつの続きの中で見られます
けれども、その人生というものがそれ自身で意味をもっているかという、人
生には意味はないのです。少なくとも、人生そのままには意味はないのです。』

『ソクラテスという人が言った有名な言葉、「生きるということが大切なのでは
なくて、善く生きるということが大切なのだ」、つまり「善く」ということ、
それは、ただ、生きている人生をその時間的な流れで、あるいはそういう形で
考えただけでは出てこないのです。人生の意味は人生の中にはないのです。

・・・われわれの存在、時間的歴史的な存在を超えたところに、実は本当の意味が
あるのです。』

『時代感覚も大切でしょうけれども・・・時代を超えたものに対する感覚、かり
に永遠感覚とでも呼ぶ・・・そういう感覚を必要とするのではないか・・・単に
流されていくというような歴史意識の生き方ではしようがないのであって、
われわれはそれを克服し、その中において、時代を超えたものを志向するよう
な生き方をしなければならないのではないか』（「歴史主義について」所収）

筆者は、人並み以上に、自分の人生は、他の誰かの価値観に縛られるのでは
なく、自分の価値観で、できることなら面白おかしく生きたいという性質の人
間であるが、同時に日本人として、先人が築き上げてきた伝統や歴史を踏まえ、
自分の子孫に思いを致しながら、野暮を避けて、粹に生きたいとも思う人間で
ある。それらが自分なりの「より善く生きる」という価値観の基軸なのだが、
田中氏の「人生の意味は人生の中にはない」という言葉は、半世紀近い年月を
超えて、極めて自然に筆者の胸に落ちる。これまで自分の祖先の日本人が、
もっと言えば人類が、その歴史の中でどのような経験を積み重ね、何を美德と
感じ、いかなる教訓を残してきたか、そして今日われわれはいかなる問題を
抱え、それを将来世代に託すべきかという価値観を持たなければ、人生の意味
など考えられないのは当然ではないかと思うのだ。

個人を超えた「命」の価値

初めに紹介した政治家の娘さんが「一番守るべきは命」と考えたのは無理も
ないと思う。なにしろ学校が「生きる」ことを第一に教えているのだ。筆者も
それを否定するものではないが、ただ一方で、単にそれだけにとどまっても
いけないと思う。

「学校で学んだことを使いながら、それぞれの子供が大人になり自分の行きたいという道を切り拓いていける、そういう力を養っていきるといいと思う」

文部科学省の新・学習指導要領「生きる力 学びの、その先へ」のビデオメッセージの一節である。文科省あるいは学校現場の様々の課題に直面した教員の先生方が、現在の日本社会の要請に応じて出したメッセージとして筆者は受け止めているけれど、子供たちが、それぞれの価値観で生きることを奨励する以上、「より善く生きる」ことへの視座も歴史観も示されていなければならないはずだ。これは文科省というよりわれわれ国民総体の課題と言わざるを得ない。

筆者は、大学のゼミや授業の中で、しばしば仮名手本（かなてほん）忠臣蔵などの歌舞伎、文七元結（ぶんしちもつとい）や柳田格之進のような落語の人情噺（ばなし）を取り上げる。同時に、黒澤明監督の「七人の侍」や半藤一利氏原作・岡本喜八監督の「日本のいちばん長い日」を授業の題材にする。これらの作品に、主君や藩の名誉のために自らやその子の命を投げ打つ精神、名誉や罪の意識と引き換えに生命を捧げんとする心意気、他者やより大きな帰属体のために身体を張って協働する価値観が描かれているからだ。それらが日本人の中でどのように語り継がれ、そして部分的にはオーバーシュートしてしまったかを、筆者の価値観を示しながら、それを押し付けずに学生諸君に考えてもらうことこそが、彼ら彼女らにとって有用で、また筆者自身にとっても有益な気づきの還元を得られるからである。

命はかけがえのないものである。だが、あらゆる生物にとって命は、種として過去から現在、現在から未来へと、鎖のように連綿と連なる存在だ。人間と他の動物との違いは、漫然と個体としての人生を本能や快樂の追求のままに生きるのではなく、過去の歴史を認識し、子孫や未来に思いを致して、それぞれが今をより善く生きようとする点にこそある。今こそ、日本人が、個々の人生を生きるのみならず、歴史意識を持ちながら、時代を超えた志向を持ちうるような、そんな教育を、社会のあり方を考えるべき時ではないかと思う。

この記事を読んだ感想、並びに普段から個人的に思うこと

1) 4月3日、産経新聞掲載の松井孝治氏の見解には全面的に賛成である。

この記事のタイトルにある「ウクライナ降伏論」を唱えるコメンテーターが日本に数多く存在する。その代表格が橋下徹氏である。彼曰く「命が何より大切だ。ウクライナの人々はそのためにまず逃げるべきであり、プーチンも10年か20年後には生きていないだろうから、その時帰還すればいい・・・」との趣旨である。（彼にこの記事を読んでもらい、感想を是非聞きたい）

かつて大阪府知事時代、個人的には橋下氏をそれなりに評価していたが、この見解を聞き、違和感と共に、歴史が全く判っていないことに驚いた。

今回ロシアに侵攻されたウクライナは地政学的理由もあり、かつて西からドイツに攻められ、東からはロシアに攻められ、海に守られた日本と違って豊かな穀倉地帯なのに、多くの餓死者を出した「艱難辛苦の歴史」がある。

一方、極東の島国で、大東亜戦争を除き外国との大戦をほぼ経験したことがない我が国には、異民族の独裁者によって、国家が占領されることの悲劇・悲惨さについて、全く想像できない人が余りにも多い。

- 2) ロシアによる今回のウクライナ侵攻により、我が国「平和憲法」の欺瞞が白日の下に晒された。戦後 75 年間の長きにわたり、お花畑を飛び回っていた「極楽トンボ」も、ウクライナの惨劇を見て少しは目が覚めただろう。ご承知のように我が国憲法前文には「日本国民は恒久の平和を念願し、(中略)平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。」と謳っているが、我が隣国に「平和を愛する諸国民」など皆無で、逆にロシア、北朝鮮、中国など、核兵器とミサイルで周辺国を脅す名だたる「国際ヤクザ国家」ばかりが存在する恐ろしい現実にある。
- 3) 国際情勢が激変する中、まず必要なのは可及的速やかな憲法改正である。だが、長年の「平和呆け」に慣れきった守旧派が与党内にも数多く存在し、加えて「何もしないのがモットー」の岸田政権に期待できないのが大変辛い。中国は台湾・尖閣を「核心的利益」と公言し、これらを必ず獲ると意志表示している習近平政権に、どう対処するかが我が国喫緊の課題である。「明日のウクライナが台湾・尖閣」との認識に立ち、まずは憲法改正を急ぎ、加えて防衛費の大幅増額を実現することから始めるしかない。
- 4) 寄稿文中にあるが、ソクラテス研究第一人者の田中美知太郎氏の次の言葉「少なくとも、人生そのままには意味はないのです。」は含蓄がある。「単に流されていくというような歴史意識の生き方ではなく、時代を超えたものを志向するような生き方をしなければならないのではないか」との指摘はその通りである。(先祖がいて、自分が存在し、次世代に繋ぐ意識) 誰しも目先のことばかりに一喜一憂し、何のために生きるのか?との根本的命題について考える機会が少ない。「より善く生きる」とはどういうことかを子供の頃から考えさせる習慣が何より大切である。ウクライナの人々が命をかけて戦っている意味は何なのか? 我々日本人は今こそ真剣に考える必要があるのではなからうか。

以上

令和 4 年 (2022 年) 5 月 1 日 守山裕次郎